

聖霊降臨後第22主日(特定28) 2011/11/13
聖マタイ福音書第25章14節～15節、19～29節
於:聖パウロ教会 司祭 山口千寿

先週は、教会歴が終わりに近づいて来て、主日に読まれる福音書が終末的な色彩が濃くなって来ていると申し上げました。世の終わりが必ずやってくる、イエスさまが再び来られる時が近づいていると初代の教会の人々は信じて、救い主の再臨に備えて日々の生活を送っていました。今日の福音書では、終末に向かうこの時を、イエスさまの弟子たちはどのように生きるべきか、その生き方について、たとえをもって教えています。

たとえそのものは、複雑なものではありません。むしろ単純に理解できます。ある人が旅に出かけます。これは復活したイエスさまが、弟子たちを離れて天に昇られたことを意味しています。旅立ちに際して僕たちを集めます。イエスさまの弟子たちのことです。この中には、わたしたちも含まれています。それぞれの能力に応じて、5タラントン、2タラントン、1タラントンの財産が預けられます。

1タラントンという金額は、6000デナリオンに当たります。当時の労働者の1日の賃金が1デナリオンですから、6000日分の賃金、1年間に300日働くとすれば、20年間分の賃金が1タラントンです。莫大なお金です。5タラントン預けられたということは、一生働いても得ることのできないお金を渡されたことを意味します。わたしたちは、自分では意識していないかもしれませんが、それほど多くのものを預けられているのです。それをどのように活用するか、大きな宿題が与えられているのです。

かなりの時が経って、主人が帰って来ます。イエスさまが再び来られる再臨の時が来たということです。世の終わりは直ぐには来ないけれども、必ずその時がやってくる。それまで預けられた財産をどのように用いて生きて来たか、それが問われる。清算が行なわれるのです。最後の審判が行なわれるのです。

その時、5タラント、2タラント、それぞれ預かった2人の僕は、そのお金を元手にして得た倍の儲けを差し出しました。主人はこの2人を、全く同じ言葉を使ってねぎらっています。金額の違い、多少は問題にされていません。2人は、「忠実な良い僕だ。良くやった」とお褒めの言葉をいただいています。そして「お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう」と更なる新しい務めと期待が述べられます。

預けられたお金は、決して少しのものではありません。生涯賃金を遥かに超えたような金額です。それにも関わらず、主人は「少しのもの」と呼んでいます。やはり、金額が問題なのではないことを示しているのでしょう。金額よりも、主人の信頼にどのように応えたか、そこがポイントです。この2人の僕は、「主人と一緒に喜んでくれ」と喜びの中に入るよう招かれています。この招きの言葉を、「さあ、一緒に祝杯をあげようではないか」と訳している聖書がありますが(柳生訳)、なかなか味な役だと思います。主人の期待と信頼に応えた僕は、天国に迎え入れられ、メシアの宴に連なる幸いを得たのです。その喜びにあずかることは、とてつもない大きなお恵みであることが強調されています。

他方、1タラントを預けられた僕は、そのお金を穴を掘って土の中に隠しておきました。清算の時に、それを掘り返して主人にそのまま返しています。その理由は、主人を恐れたからです。失敗してお金を失うことになったら、厳しく責任を問われることになるのではないかと恐れたのです。

僕たちは神さまから預けられたものを、それがあたかも自分のものであるかのごとくに、自由に用いて働くようにと任せられたのです。それだけの権限が委ねられたのです。主人がいない間、主人に代わって仕事をするように、務めが与えられたのです。それだけの能力があると認められて、主人の手伝いをすることを期待されたのです。第3の僕は、そのことに気付きませんでした。ただ、恐れることしかしませんでした。預けられたものを埋めただけではなく、同時に、主人との関わりの中で積極的に生きることも放棄して、その生き方を土の中に埋めてしまったのです。

話は変わりますが、聖パウロ教会では、以前より3種類の教会関係の新聞を購読しています。1つは『聖公会新聞』です。皆さんの中にもお読みになっている方がおられると思います。あとの2つは、『カトリック新聞』と『キリスト新聞』です。

『キリスト新聞』はプロテスタント系の新聞ですが、毎号、第一面に『論壇』という社説ではないけれども、その折り折の問題について、執筆者個人の見解が述べられている欄があります。今年は、カトリック、聖公会、ルーテル教会、救世軍、その他の教団から7人の執筆者が交代で書いています。わたしは、そのご意見に必ず目を通すようにしています。

その1人に、1962年に滋賀県の近江に止揚学園を創立し、今なお、お元気で働いておられる福井達雨さんがいます。止揚学園についてはご存知だと思いますが、知能に重度の障害をもつ子どもたちの施設です。知能に重い障害をもった子どもたちと、障害をもたないものとがぶつかり合い、今までになかった新しい生き方が生まれる場にしたいと願って、止揚学園と名付けられました。

その福井さんが、学園でのご自分の経験を通して、現代の社会の問題点を鋭く指摘する論説を書いています。毎号、ハッと教えられるところの多い文章が載せられています。

ある号に、次のような話がありました。止揚学園に中途失明で入って来た満子さんという知的障害のある女性は、外を歩くのが恐ろしくて、いつも部屋の中に閉じこもっていました。そこで福井さんは、嫌がる満子さんを外に連れ出して歩く訓練を始めました。その日は、速く歩けるようにと川の堤防を手を取って歩いていました。ところが、突然、満子さんが座り込んでしまい、立たせようとしても立とうとしないのです。福井さんは、そんな満子さんを「強情だな」と思い、気持ちが切れてしまい、黙って満子さんを見ていました。

しばらくすると、満子さんがニコッとするのでした。福井さんは、困っている自分のことを考えずに、なんでニコッとするのでと、イライラしたそうです。しかし、満子さんがどうしてニコッとするので、それに気付いた時、ハッとしました。

満子さんがニコッと笑うのは、風が2人を過ぎていく時であったり、川のせせらぎが耳に届く時、そして小鳥のさえずりが伝わる時なのです。

それまで、福井さんに聞こえていたのは、自動車や自転車など、自分の身に危険な音で、自然の美しい音(ね)は聴こえて来なかったのです。満子さんは強情で座り込んだのではなくて、自然の音(ね)が聴きたかったのです。頑張れドンドンで急いで歩こうとしていた時には、満子さんの顔には苦痛ばかりが現れていたのに、ゆっくり歩き始めると明るい笑顔が見えて来たのです。福井さんは、満子さんの側に立ち止まった時に、満子さんの心の音(ね)やいろいろな音(ね)が聴こえるようになったのです。

こう書いています。「音(おと)だけで、音(ね)の世界が失くなると笑顔は生まれてこうへんな。笑顔はイエスさまのお恵みや。そやから笑顔はわたしたちを明るく、優しくしてくれるんやな。」そう感じて心が自然に安らかになったと書いています(2011/9/17)。

満子さんには、自然の美しい音(ね)に素直に感応する心があるのです。失われていないのです。物事を知的に捉える力は、障害のない者のようにはいかないかも知れませんが、しかし、知性に最高の価値を認め、それ以外の人間に与えられている能力を軽視する風潮のある現代人が失いかけているものを豊かに保ち、そこから生きる喜びを感じ取っているのです。

今日のたとえに出てくるタラントンは、何を指しているのでしょうか。それが何であるか、福音書の中には解説されていません。解釈は、このたとえを読む者に任せられています。わたしは、これを「霊性」と理解したいと思います。毎主日、代祷の中で、「神の霊に共振れする霊性が一人一人の内に形成されますように」と祈り求めています。満子さんが、自然の美しい音(ね)に感応して自ずと笑顔が浮かぶように、わたしたちも神さまの息吹に触れて、神さまの霊と一緒に振動するのです。それが、共振れ、共振です。そのような力、わたしたちに備えられている能力を、霊性と呼んで良いと思います。そのタラントンが預けられている。それ

を活用することが期待されているのです。そのタラント、靈性を精一杯、生かして用いることで、わたしたちは神さまとの交わりをもっと豊かなものに、深いものにしていく可能性が開けてくるのではないのでしょうか。そしてそこから、外に向かった働き、力が、溢れ出てくるようになるのではないのでしょうか。

今日の福音書の最後のみ言葉をもう一度読んで、終わりたいと思います。

「だれでも持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまで取り上げられる。」